
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 191

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 3801. シューベルトの音楽に範を求めて
- 3802. 今朝方の夢
- 3803. 春から行なうべき諸事項の整理:ピアノソナタと死という目的
- 3804. ソナタ形式の曲:死という究極的な完成
- 3805. ドッグランだった目の前の空き地から学んだこと
- 3806. アーネスト・ベッカーの書籍より:死と創造活動
- 3807. 死の拒絶と死の隠蔽が蔓延する現代社会
- 3808. 夭折した作曲家への関心:昇華作用を持つ作曲実践
- 3809. 今朝方の夢
- 3810. 死への感性
- 3811. 戦場で死に対する恍惚感を覚える夢
- 3812. 今朝方の夢の続き
- 3813. スケープゴートの論理
- 3814. 甘美な死と新生活を示唆する今朝方の夢の再想起
- 3815. 身体的・精神的な癒合症の治癒に関する夢
- 3816. 近づく春:今朝方の夢の続き
- 3817. 知性の無数の重心点を作る網の目としての人間
- 3818. 非民主主義的な教育:カネへ自己投影する現代人
- 3819. 真の自己理解の難しさ
- 3820. 今朝方の夢

時刻は午後の七時半を迎えた。今日もまた、一日が静かに流れ去っていった。そうした感覚と同時に、確かに自分の内側で何かが増積していったという小さな感覚がある。時は過ぎ、時は流れていくが、自分の内側には流れることのないものがあり、さらには時の流れに流されることなく積み重なっていくものがあることを知る。

今日は、昨日に届いた“Analyzing Schubert (2016)”を200ページほど読み進めていった。もちろん、隅から隅まで一字一句読んでいったわけではなく、今回は初読であるから、自分の関心を引く箇所を中心に読み進めていった。下線を引く箇所、そして書き込みをする箇所が随分と多かった。これまで自分が抱いていたシューベルト像、ないしはシューベルトの音楽に対する印象が肯定的な意味で変わり、よりシューベルトの音楽に関心を持った。

本書を読み進めていったことが確かな刺激となり、今夜はこれから、シューベルトの曲に範を求めて作曲実践を行おうと思う。シューベルトのピアノ曲に関しては、すでに楽譜を三冊ほど持っていたのだが、これまでシューベルトの曲を参考にしたのは数回ほどだと思う。ここから少しずつシューベルトに範を求めて作曲実践を行い、少しずつシューベルトの作曲語法に慣れ親しんで行き、それらを少しずつ我が物にしていく。

上記の書籍を読んでみると、シューベルトのハーモニーに関しては、過去の多くの音楽理論家は批判的な意見を述べているようだが、著者はシューベルトのハーモニーに対していくつもの洞察を見出している。それらの説明を読んでみると、シューベルトのハーモニーの技術については特に学ぶことが多いだろうと考えている。上記の書籍を読み始めたことは、作曲実践に早速確かな影響を与えている。作曲技術というのはこのように深まっていくのだろう。

過去の多くの音楽理論家の仕事を参考にし、彼らが見出した観点に触れるたびに、何か触発されるものがあり、それを実際の作曲実践で活用してみる。そうしたサイクルをこれからも大切にしたい。

ちょうど今、シューベルトのピアノ曲を聴いている。ここから数日間は、この八時間に及ぶピアノ曲全集を聴いていきたい。シューベルトについて思いを馳せるとき、二年前に訪れたウィーンの記憶が

蘇ってくる、シューベルト博物館で見た、シューベルトが実際にかけていた眼鏡がとても印象に残っている。

若くしてこの世を去ったシューベルトは、どのような死生観を持っていたのだろうか？また、その死生観は彼の音楽の中でいかように体现されていったのだろうか？そして、それはどのような形で楽譜に現れ、いかにしてそれを楽譜から汲み取ることができるだろうか？そのような問いが頭に浮かぶ。

結局今日は、昨日に予定していた実験をすることができなかった。それは、スクリービンが発明した神秘和音を実験してみることや、ストラヴィンスキーやラヴェルも活用していたペトルーシュカ和音を実験してみることである。明日は、バッハのコラールを参考にする際に、Cメジャーキーを選択して、それらの実験を是非行いたいと思う。フローニンゲン:2019/2/9(土) 19:48

3802. 今朝方の夢

今朝は五時半過ぎに起床し、六時を迎えた頃から一日の活動を始めた。今日もまた静かに新たな一日が始まった。

今、外の世界には雨が降っている。どうやら今日は、一日を通して雨となりそうだ。

いつもの通り、まずは今朝方の夢について振り返っておきたいと思ったが、今朝方の夢をほとんど思い出すことができないことに気づく。ただし、夢で感じていた感覚を分類するならば、それは非常に肯定的な感覚に分類することができる。

今、一つだけ夢の場面を思い出した。夢の中で私は、ある宿泊施設の中において、そこでキックターゲットのようなゲームに参加していた。男女合わせてかなりの数の小中学時代の友人たちがその場において、私の応援をしてくれていた。

キックターゲットに参加している私の格好はその場にはふさわしくなく、スーツを着ていたように思う。見知らぬ何人かの男性が、ボールを蹴って目標物に当てることを失敗している中、私の番がやってきて、私は見事に目標物にボールをぶつけた。その際に、思わずガッツポーズをしたが、それはあ

る有名な日本人サッカー選手のポーズと同じであり、もう少し別の表現方法があったのかもしれないと気恥ずかしくなった。そのような場面があったことを覚えている。

その前後にも他の夢が存在しており、前の夢については全く覚えていないが、後の夢の場面では、日本人の女性と数名の見知らぬ気さくそうな外国人と何かを楽しげに話していたのを覚えている。

今日は少しばかり深層意識も穏やかであったのか、夢について覚えているのはそれぐらいしかない。仮に夢についてほとんど覚えていなくても、覚えている限りのことを書き出すことを今後も続けていく。また、今日のように、全く何も覚えていないように思えても、思い出そうとしてみることによって、夢の断片を思い出すことができることがよくある。そうしたことから、夢を思い出そうとすること、そして思い出された夢を文章の形に残しておくことをこれからも続けていく。

夢日記をつけることは、確かに自己発見と精神の治癒をもたらす得るが、今の私は、それらの効果を実感しながらも、そうした効果を得るために夢日記をつけている訳ではないことがわかる。厳密には、夢日記を通じて自己発見と精神の治癒を得ることは確かに大切かもしれないが、それ以上にもっと重要な何かがこの実践に潜んでいることに気づいており、その何かに衝き動かされる形で夢日記を執筆し続けているのだと思う。

時刻は午前六時半を迎えた。今日は昼食後に、一件ほどオンラインミーティングが入っている。それ以外には、特に協働関係の仕事はないため、本日もまた、音楽理論や作曲理論に関する書籍を読み、作曲実践を旺盛に行っていこうと思う。

作曲実践において何かの実験をするたびに、自己の新たな側面が開かれていく感覚がある。晩年のピカソをもってしても、創造活動というのは絶え間ない実験であるとみなしていたように、今日もまた様々な実験をしていく。そうした過程の中で、自分の技術を磨いていき、自己を涵養していく。そして涵養された自己を通じて、この社会に資する実践を小さく継続していく。フローニンゲン:2019/2/10(日)06:36

No.1664: The Jolly Ground

It is fine weather today after a long time.

I'll go running after I take a nap in the afternoon. Groningen, 11:52, Monday, 2/11/2019

3803. 春から行なうべき諸事項の整理:ピアソナタと死という目的

昨日の朝に、ハーバード大学教育大学院(HGSE)より、面接の招待に関するメールが届いてから、今回の出願の結果がどのようなものであったとしても、春以降から少し慌しくなると思った。合格発表そのものは、三月の初旬とのことであり、発表を受けて、諸々の準備をしていく必要がある。それは例えば、米国での家探しから始まり—すでに二、三の物件を見つけているが—、引越しの準備、オランダの銀行や役所での手続き、日本で一、二ヶ月間生活するための家の確保等、様々なことを行っていく必要がある。

仮にHGSEから合格通知が届き、スイスではなくアメリカに行く決断をしたら、今回は成人以降に経験する三回目の留学となる。欧米諸国の大学院に留学するのはもう三回目であるから、諸手続きの流れはすでに把握しているのだが、とは言え、何をどのタイミングで行っていく必要があるのかを、昨日から少しずつワード上にまとめるようにしている。それを行い始めたのは、書き出すことによって思考を整理する必要があると感じたからである。とりあえず、現段階で必要だと思われる諸々の事柄を書き出したが、それはまだ網羅的なものではないだろうから、細かなことも含めて、必要なことを思いついた都度、それをワード上に書き出していこうと思う。

今週の木曜日には、午前中に協働プロジェクトに関するミーティングを行い、午後からはHGSEのスカイプ面接がある。その面接に対して、肩肘を張る必要は全くないと思うが、自分が提出した書類に関しては、面接の前に全て読み返しておこうと思う。特に、志望動機書に関しては、何度か音読をしておこうと思う。そうした準備をすることによって、当日の面接官との対話をリラックスして楽しむ余裕が生まれてくるだろう。

博士課程のプログラムに応募する際には、最後に面接が課せられていることを知っていたが、修士課程のプログラムに面接があるとは、アプリケーション上の説明には一切書かれていなかったため、スカイプ面接の招待が届いた時には少し驚いた。今回の面接も一つの縁であると認識し、その縁を大切にする形で面接を受けたいと思う。

昨日から読み進めている、“Analyzing Schubert (2016)”という書籍は、実に洞察に溢れている。書籍の中に引用されていた、ピアノソナタに関する思想に感化されるものがあった。

ピアノソナタとは、目的論的な衝動に基づいて、曲がエネルギーの連続的な流れを通じて、ひとつの終焉に向かっていく特質を持っている。目的論的な世界観に関しては幾分注意が必要なこともあるが、最近私は、人間が生きて行くプロセスというのは、やはり究極的な目的に引き寄せられる形で、ないしはそこに向かっていく形で進行しているように思えてくる。そこには当然ながら、私たちにとって不可避な死という現象があり、それが私たちを究極的な目的に近づけていくのかもしれない。ひょっとすると、私たちの究極的な目的は死なのかもしれない。

私たちが死を目的にして生きているというのは幾分奇妙に響くかもしれないが、人生は死に向かって進行していくプロセスであることは間違いなく、人として生きる究極的な目的と死には密接な関係があるように思えてくる。

死という現象を抜きにしては、人間存在や人間の生きる目的に関するいかなる説明も非常に頼りなく、そして味気ないように思える。そのような思いについて考えてみると、死は私たちの拠り所になりうるものであり、死とは固有の味を持つものなのかもしれないことが見えてくる。フローニンゲン：

2019/2/10(日)07:01

No.1665: A Way to Some Place

Now today is slowly approaching the end. It implies that I'm going to some place. Groningen,
18:06, Monday, 2/11/2019

3804. ソナタ形式の曲:死という究極的な完成

静かな闇の世界が辺りに広がっている。あちらの世界もこのような静けさに包まれているのだろうか
と想像する。

時刻は午前七時を迎えた。私はたいていの場合、特に何かを書こうと思って文章を書いているわけ
では決してなく、書くことに自分を向かわせる何かがあると言える。ただし、文章を書くという行為を

衝動的に行っているかというところでもない。確かに、欧州で生活を始めた初年度においてはそのような衝動が強かったかもしれないが、今の私はそういうところにはいないようだ。

文章を書くことに対して、健全な距離が取れているように思う。文章を書くことによって、自己と自己を取り巻くリアリティが紐解かれていく感覚があり、何かが開かれていく感覚がある。書くことの個人的な意義はそこにあると思うが、そうした意義とも適切な距離が保たれているように思う。そうした適切な距離を保ちながら、今日もまた日記を綴っていくことになるだろう。

鴨長明が『方丈記』を徒然なるままに綴った境地が少しばかり見えてきているかのようだ。これからも、曲としての日記のみならず、文章としての日記を綴っていくことになるだろう。

今日もまた、一日中シューベルトのピアノ曲を聴いていこうと思う。昨日読み始めた書籍に影響を受け、今後はピアノソナタの形式を用いて曲を作っていくことも良いかもしれないと思うようになった。これまでは、とにかく詩のような短い曲を作ることを大切にしていたが、それに並行して、ソナタ形式の比較的長い曲を作っていくことも、一つ重要なことであるように思えてきた。

おそらく、ソナタ形式を採用した曲を作る過程の中で、様々な発見を得ることができるだろうし、ソナタ形式という独自性ゆえに、自分の作曲技術もまた新しく発達していく可能性がある。そうしたことを考えると、近々、ソナタ形式の楽章を毎日一つ作ってみることも試みてみたいと思う。

とはいえ、やはり私の主眼は、日々の内的感覚を詩のように短い曲として表現していくことにあるということを忘れてはならない。当面は、もう少しピアノソナタに関して学習を進め、どこかの時期を境目に、一つの楽章を毎日作っていく試みを始めたいと思う。

昨夜、シューベルトの曲を参考にして一つ曲を作ってみた。その前に、シューベルトの楽譜をパラパラと眺めていたところ、未完成の曲に目が止まった。手持ちの楽譜には、シューベルトの未完の作品もいくつか収められており、私は偶然にも、一つの未完の作品に思わず目が止まった。

“Unfinished”という言葉を見たときに、どこか自然と込み上げてくるものがあった。

私たちは誰も、決して完成することのないものを完成させようとする中で人生を終えるのかもしれない。ひょっとすると、人生においては、何かを完成させる必要などないのではないかと思えてくる。

もしかすると、死というものが究極的な完成であって、それを迎えるまでは、何かを完成させるという気持ちというのは不必要なのかもしれない。

絶えず形を生み出し続けること。それを通じて生きていくことが、死という究極的な完成を成就するための要諦なのかもしれない。シューベルトの未完の作品を眺めながら、そのようなことを考えさせられていた。フローニンゲン:2019/2/10(日)07:27

3805. ドッグランだった目の前の空き地から学んだこと

時刻は午前11時を迎えた。あと一時間ほどすれば昼時となる。

日曜日が静かに流れていく。早朝より小雨が降り続けており、辺りは幾分侘しげな雰囲気を感じている。

先ほど作曲をしながら、荒野にも花々が咲けるということは、私たちはどこでも己の花を咲かせることができるということだろう、ということも思っていた。確かに外の世界は侘しげなのだが、同時に、どことなく冬の生命力を感じられるから不思議だ。それは生物たちの生命力のみならず、冬という季節そのものの生命力も含まれている。どうやら、季節にも固有の命があるようだ。

午前中に、何気なく窓の外を眺めていると、一つ驚くべきことに気づいた。欧州での三年目の生活もすでに半分ほど経ったところで、自宅の目の前の空き地がドッグランであることに気づいたのである。

偶然犬の散歩をしている人がいたので、その人の様子を観察していると、空き地には、人間の腰ほどの高さの小さな木の扉があることを知った。その扉を開け、その人は犬と散歩を楽しんでいた。

これまでその空き地がドッグランだと気付かなかったのは、その空き地にはきちんとした柵がなく、植木が柵代わりになっているだけであり、二つの扉に気づかなかったからである。しっかりとした柵がないがゆえに、リードは付けたままであることも、そこがドッグランであることに気づかなかった理由である。

三年間の生活の中で、その空き地を犬が元気良く走っている姿を一度も見ることがなく、犬が飼い主と一緒にゆっくりと歩いている光景を目撃したことがあるだけなので、その空き地は「ドッグウォーク」と呼べるかもしれない—ただし、そのような名前をつけてしまうと、すべての場所がドッグウォークと呼べることになってしまうだろう。

改めてその空き地を眺めてみると、確かに犬がくぐり抜けるような木の設備があつたりする。新たな気持ちを持って観察してみなければわからないことが沢山あることを改めて知る。日々、新たな気持ちと新たな眼を持ってこの世界を眺めてみよう。そのようなことを思わせてくれる出来事だった。

今日は午前中に二曲ほど曲を作り、ウォルター・ピストンのハーモニーの書籍を少しばかり読み進めた。今から昼食までの時間を活用して、“Expanding Tonal Awareness: A Musical Exploration of the Evolution of Consciousness (2014)”という書籍を再読していこうと思う。この書籍は非常にユニークな観点から書かれた書籍である。というのも、特にシュタイナーの思想を活用して、調性と人間の意識との関係性を探究しているからである。調性の変化は意識に影響を与え、調性感覚の拡張は意識の拡張に左右しうる可能性がある。

まずはもう一度目次を眺め、気になる箇所を中心に再読を進めていこうと思う。再読に熱中していると、昼食の時間がすぐにやってくるだろう。フローニンゲン:2019/2/10(日)11:28

3806. アーネスト・ベッカーの書籍より:死と創造活動

時刻は午後の五時半を迎えた。辺りは薄暗くなっており、今は小雨が降っている。

今週もまた静かに終わりに向かい、明日からはまた新しい週がやってくる。日々が淡々と水のごとく流れていく。

今日は音楽理論に関する書籍を読むだけではなく、午後に突然、死を文化人類学的かつ社会的に探究したアーネスト・ベッカーの書籍が読みたくなった。手元には、代表作のうち、“The Birth and Death of Meaning: An Interdisciplinary Perspective on the Problem of Man (1971)” “The Birth and Death of Meaning: An Interdisciplinary Perspective on the Problem of Man(1971)” “The Denial of Death(1973)”の三冊がある。それらを改めてもう一度読み返していこうと思った。

音楽理論の書籍を読み終え、作曲実践の最中にふと、ベッカーの書籍に手が伸びたのだが、その背後には、やはり私自身が人間存在と死、さらには創造活動と死の関係性について関心があるからだろう。それはもはや無意識的な関心ではなく、すでに言葉の形になっているように、意識的な関心となった。ここからは、この関心に沿って探究を進めていき、それらの主題について理解を深めていこうと思う。

ベッカーの書籍を少しばかり読み進めると、この人生も死も、一度しかないという点において共通していることに改めて気づいた。そこからさらに、死と幸福について考えてみると、もしかすると不老不死というのは、人間にとっての最大の不幸であり、終わりがあることが人間にとっての最大の幸福なのかもしれないという考えが芽生えた。何があっても死なないということ以上に地獄はあるだろうか。そうした状態は、まさに生き地獄だと言えるかもしれない。

欧州での三年目の生活において、死に対する関心がなぜだか高まっている。そうした関心は、作曲という創造活動への関心の高まりの後にやってきた。

今の私は、作曲と死の探究に幾分取り憑かれていると言えるかもしれない。これがどういった現象であり、何を背景にして生まれたものなのかについてはまた自分で考え、自分なりの説明と答えを見出していく。

今日も現時点ですでに三曲ほど曲を作った。もしかしたら、人間の創造力の源は、死の拒絶にあるのかもしれないという想念がよぎる。私は毎日、ほぼ一定のペースで曲を生み出し続けているが、これは死の拒絶の表れなのだろうか。おそらくそうした側面は多分にあるだろう。だが、そうだと割り切れない側面があることも確かだ。そして、それこそが芸術の本質であり、創造活動の最重要な点なのではないかと思う。

しかしながら、今の私にはそれが何かについて明確に語ることはできない。それを自分なりの言葉で説明できるようになった時、創造活動が死の拒絶によって引き起こされているものではなく、死を超越した形でなされる実践へと昇華されたとみなすことができるだろう。もしかすると、今述べたように、創造活動の根底には、死と真に対峙し、死を昇華させ、それを超越していく力、ないしは意思があるのかもしれない。今後、死の探究を続け、死と真に対峙することができるようになってくると、

自分の創造力はいかように変容するのだろうか。そのようなことにも関心がある。フローニンゲン：
2019/2/10(日)17:55

3807. 死の拒絶と死の隠蔽が蔓延する現代社会

時刻は午後の六時を迎えつつある。これから日記を書き留め、その後、入浴をしながらリラックスしたいと思う。

先ほど、創造活動と死の関係性について言及したが、この主題をさらに深く探究していく際には、アーネスト・ベッカーの書籍と、さらには、オットー・ランクの“Art and Artist: Creative Urge and Personality Development (1989)”が参考になるかもしれないと思い、こちらの書籍も本棚から引っ張り出してきた。ちょうどその本に対する推薦文は、ベッカーが執筆しており、やはりランクとベッカーの関心は共通したものがあつたのだろう。そしてそれは即、私の関心とも合致していることを示す。

現時点では、人間が行う創造活動には二つの方向性があり、一つは死の拒絶のためにそれを行うというものと、死と対峙し、それを乗り越えていく、ないしは死を昇華し、死を生と調和させるために創造活動を行うという方向性がありそうだ。

現代社会の創造活動のほとんどは、前者に該当するように思われる。そしてそれは、物質資本主義的な消費活動と癒着しているという点にも注目をする必要があるだろう。おそらく、創造活動と死に関するテーマを探究していくためには、現代の社会・文化的な特性、とりわけ経済活動の特性について理解を深めていくことが不可欠だろう。確かに私は学部時代に経済・経営を学んでいたが、学部時代で学んだ知識は有益でありながらも、そうした知識では今の関心事項の探究をするにはあまりにも物足りない。経済をいかなる角度から探究していくかはほぼ明確になっているので、あとは良書を見つけ、関連書籍の網の目を辿っていくように探究を進めていこうと思う。

これから現代の諸々の創造物、さらには過去の諸々の創造物を眺める際には、その背後に死の拒絶の匂いがするの否かを意識したいと思う。人間が生み出す形のほとんどは、死の拒絶が背後に隠れたものなのかもしれないが、そうではないものも必ずあるはずだ。そうでなければ、自分がこれから一生涯にかけて行っていく創造活動の意味的基盤が溶解してしまう。死の拒絶を超越した創造活動とはいかなるものなのか。その特質について探究を進めていく。

ベッカーの書籍を読み進めていると、いくつも洞察に溢れる考えが紹介されており、つい先ほどは、「自己陶酔的資本主義(narcissistic capitalism)」という言葉に目が止まった。これは端的には、資本の多寡と力を同一視する発想のことを指す。しかしこれは、単に資本の多寡のみならず、例えば知識の量などを含めて、他の無形のシンボルにも該当することなのではないかと思った。おそらく、こうした発想の枠組みがこの現代社会に蔓延していることによって、人々は絶えず他者に対して嫉妬や妬みの感情を覚えるのかもしれない。

そもそも、妬みや嫉妬の背後には、ベッカーが指摘するように、自分が貶められることへの恐怖があり、その根底には生存の危機への恐怖があるのだろう。これもまた、死の恐怖と密接に関係している。

そうしたことを考えてみると、社会では頻繁に、マスメディアやソーシャルメディアを通じて、何かに優れている人の功績を世に知らしめることを行っているが、これはもしかすると、人々が不可避にもつ「自分が貶められることへの恐怖(端的には劣等感)」を助長し、妬みや嫉妬を増幅させることにつながっていると言えるかもしれない。

そうした動きの一方で、マスメディアやインターネットの世界では、自己を肥大化させることを推奨するような甘言と提言で溢れていることも窺える。そうした事態が見えてくると、この社会は、自己の肥大化と自己の矮小化という二つの矛盾したものを同時に私たちに突きつけていることがわかってくる。そうした矛盾を引き起こすメッセージや文化的コードが絶えず産出されている様子は、本当に奇妙であり、不気味ですらある。

自己の肥大化と自己の矮小化も共に、死の拒絶と密接に関わっていることを考えると、この現代社会において、真に死と対峙すること、死を昇華して人生と調和させることが極めて難しいことが見えてくる。

この現代社会は、霊性が枯渇しているだけではなく、根本的には死が不在なのかもしれない。そこにあるのは偽装的な死と、死の重要な側面と貴重な価値を隠蔽する活動だけなのではないかと思えてくる。そのように考えると、現代社会は、真の意味での死を体験することができず、真に自らの

人生を生き切ることが極めて難しい社会だと言えるかもしれない。フローニンゲン:2019/2/10(日)
18:17

3808. 夭折した作曲家への関心:昇華作用を持つ作曲実践

時刻は午後の七時半を過ぎた。つい今しがた、夕食を摂り終えた。これから就寝に向けて、一日を締め括る諸々の活動に従事していく。

今日は一日を通して天気が悪く、今は小雨の雨脚が強くなった。一台、また一台と、水しぶきを上げて走る車の音が聞こえて来る。

今日は夕方に、アーネスト・ベッカーの書籍を読み進めていた。その内容と、本日読み進めていた音楽理論に関するテキストの内容が相まって、自分の作曲活動の意味が根底から変化していることに気づいた。

これまでの私は、作曲実践を通じて、自己をより深く知ることや、自分の内面世界及び人生を深めていくことに焦点を当てていたように思う。だが、作曲を始めて一年ほどが経ち、作曲実践が持つ意味はそこに留まらなくなった。端的には、作曲実践が自らの死と向き合うこと、そして死を人生に調和させる試みとなったのである。

人間はいかようにして死と真に向き合い、それを超越していくことができるのか。それを作曲実践という創造活動を通じて探究し、それを実際に実現させていく。作曲実践一つをとってみても、過去の自分が持たせていた意味合いはもうそこにはない。作曲の意味が根本的に変わってしまったのだ。

こうした様子を見ていると、私たちが構築する意味、さらには見出す意味は、本当に変容していくものであることがわかる。まさに、ロバート・キーガンが述べているように、私たちは意味を構築することを宿命づけられた存在であり、自己の深まりと共に、私たちが見出す意味は深まっていくのだ。作曲実践が持つ意味の変化を目の当たりにするとき、変容という現象が自分の中で確かに起こったのだということがわかる。

今日は昨日に引き続き、シューベルトのピアノ曲をずっと聴き続けている。実は私は、夭折した偉大な作曲家に対して、どこか親近感を覚え、彼らに対して強い関心を示す傾向にあることがわかる。若くしてこの世を去った作曲家の代表例としては、モーツァルト、シューベルト、ショパンなどが挙げられる。彼らの音楽を聴いていると、時々、死の足音を聴いたり、死の香りを嗅ぐかのような感覚に陥ることがある。どの作品のどこにそれらを感じるのかまでは把握していないが、全体として、彼らの音楽の中には、死の影が存在しているように感じられるのである。

彼らは実際に若くしてこの世を去った。彼らは必ずや、どこかの時期から、自らの死を意識しながら創造活動に励んだに違いない。そうしたことが、彼らの音楽の中に死の影を宿らせているのだと思う。彼らの死生観とはいかようなものであり、それはどのように彼らの音楽の中に具現化されているのか。そうした観点を持って彼らの音楽と接し、今後の自分の作曲実践につなげていきたいと思う。

チャイコフスキーが、悲しみを絶えず美しく昇華させていたように、死という現象、及びやってくる死が引き起こす感覚を昇華させることが自分にできるだろうか。その実現に向けた学習と実践を継続させていきたい。

これまでの作曲実践を通じて、作曲には感情を昇華させる力があることは明らかだ。また、作曲には、精神的な変容作用と治癒作用を認めることができる。そうしたことを踏まえると、死を昇華させていくことも不可能ではないように思えてくる。

小雨は止むことを知らず、闇の世界の中でその存在感をさらに強めている。フローニンゲン:2019/2/10(日)19:55

3809. 今朝方の夢

今朝は六時過ぎに起床し、六時半から一日の活動を始めた。起きてすぐに天気予報を確認すると、嬉しいことに、今週一週間は雨が降らないようだ。晴れマークが付く日が多く、それでいて気温も比較的暖かい。今週の金曜日は、確かに最低気温はまだ1度と少し低いが、最高気温は10度を越すようである。少しずつであるが、着実に春に向かっており、春の足音が聞こえて来る。

昨年の記事を読み返すと、三月初旬においても気温がマイナスになる日もあったようなので、まだ気を抜けないが、それでも春はもうすぐそこにあることがわかる。

今朝方は、実は一度五時前に起床していた。少しばかり目覚めが早いと思ったため、起床前に見えていた夢をメモ用紙に書き留めて再び寝ることにした。まずはそれらの夢について振り返っておきたい。

夢の中で私は、少し古びた倉庫のような場所にいた。そこは倉庫であったから、荷物が置かれていたのだが、フロアの作りは体育館のようであった。とはいえ、体育館ほどの面積はなく、その大きさを半分、ないしは三分の一にしたぐらいのものであった。その倉庫の中には、中学校時代の部活の先輩が何人かいて、私の友人も何人かいた。

私たちは、その倉庫で、これからホッケーをやろうということになった。私は、部活で副キャプテンを務めていた先輩と同じチームになり、こちらのチームはその先輩と私だけだった。相手のチームは、先輩二名と友人の二名である。倉庫の両端にゴールを設置し終わると、いざ試合が始まった。なぜだか、こちらのチームの先輩はホッケーのスティックを持っていたのだが、私は持っていなかった。さらには、ホッケーで用いるパックはコインのようであった。先輩は、スティックを器用に操作し、地面の上をパックを見事に滑らせていき、シュートを打って早速ゴールを決めるかと思った。

だが、相手のキーパーにそのシュートが当たり、得点にはならなかった。相手のキーパーが一気にカウンターでパックを投げ、それが私たちのコートに待っていた相手の選手に渡り、あわよくば得点になるかというところで、先輩がなんとか防いでくれた。

今度はこちらからカウンターを仕掛けようと思ったが、相手は人数も多く、攻撃と守備をきちんと分けているようであり、すでに相手の陣地には何人かの人かいて、カウンターとは言い難いながらも、速攻を仕掛けた。先輩が私にパックを渡してくれたのはいいものの、私はスティックを持っていないため、ちょうど素足でその場にいたので、パックを足の裏で止め、そこからは足の裏でパックを握るような形で相手ゴールに向かっていった。

足の裏で扱うと、意外とパックを運びやすいことに気づき、私は相手ゴールの近くでシュートをし、それがゴールラインを少し割る形で得点となった。先輩と私が喜んだところで夢の場面が変わった。

倉庫でホッケーをしていた意識が残っているかのように感じられる形で、次の夢の場面の中に私はいた。そこは東ヨーロッパ、ないしは中央ヨーロッパのどこかの国であった。

私は、中学校時代の友人(YU)と一緒に、古びた駅の構内にいた。私たちは、これからヨーロッパのどこかの国に向かっており、駅で切符を購入することにした。

駅員のところに行き、そこでこれまで乗ってきた列車の切符を見せた。友人が財布から切符を取り出した時、それが数十枚の束になっていることに驚いた。どうやら私たちはかなりの量の列車を乗り継いできたようであり、しかもその駅で切符を購入するためには、これまでどのような駅で下車したのかを証明する必要があり、それまでの切符を全て提出しなければいけないようであった。

しかもそれは、乗った列車の日時ごとに、時系列で並べ、それらの切符をホッチキスでとめないといけないとのことであった。なぜかわからないが、私の手元にはホッチキスがあり、友人はそれを持っていないようであったから、私は友人にそれを貸してあげた。厳密には、友人に切符を押さえておいてもらい、私がホッチキスをとめた。思っていたところとはちょっと違う場所にホッチキスを打ってしまったが、それでも問題ないと思い、私たちは駅員に切符の束を渡した。

すると駅員が、「どこの国を経由してこちらにきましたか？クロアチアを経由しましたか？」と尋ねてきた。私たちは、クロアチアを経由した記憶はなく、「クロアチアを経由していません」と述べると、私は突然何かを思い出したように、そういえばクロアチアのある町を経由していたことを思い出した。その町の名前を伝えると、駅員の顔が少し曇り、切符の発行は難しいと言う。その町は別に犯罪都市でもなく、単なる観光都市であり、しかも私たちはその町に滞在したわけでないため、私はなんとか駅員を説得し、それがうまくいき、無事に切符を入手した。

時刻を見ると、列車の発車時間まであと三分になっており、私たちは急いで、黒々とした蒸気機関車に乗り込んだ。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/2/11(月)07:17

No.1667: A Dulcet Whistle

I heard a dulcet whistle of death. Groningen, 21:16, Monday, 2/11/2019

3810. 死への感性

時刻は七時を少し過ぎたところである。窓の外を眺めると、まだ七時半を回っていないのだが、辺りは真っ暗闇ではなく、空がダークブルーに変わり始めている様子を見ることができる。

今、小鳥が鳴き声を上げた。少しずつ日照時間が長くなり、日が昇るのが早くなっているのがわかる。

書斎の開放的な窓に面した形で机を配置しており、私は四六時中外の景色を眺めることができる。そうしたことを毎日何気なく、時には意識的に行っていると、景色の変化がつぶさにわかってくる。

これから少しずつ冬の色が薄くなっていき、春の色が濃くなっていくだろう。また、冬の音が小さくなり、春の音が大きくなり始めるだろう。春の到来がとても楽しみだ。

昨日は、死という現象を文化人類学的・社会的に探究したアーネスト・ベッカーの書籍を何冊か本棚から取り出し、そのうちの一冊を再読し始めた。本日も、音楽理論の学習の傍らに、ベッカーの書籍を読み進めていこうと思う。

ここからしばらくは、ベッカーの“The Birth and Death of Meaning: An Interdisciplinary Perspective on the Problem of Man (1971)” “The Birth and Death of Meaning: An Interdisciplinary Perspective on the Problem of Man(1971)” “The Denial of Death(1973)”の三冊と、エディス・ワイスコグロッドの“Spirit in Ashes: Hegel, Heidegger, and Man-Made Mass Death (1990)”、そしてotto・ランクの“Art and Artist: Creative Urge and Personality Development (1989)”を読み進めていこうと思う。それらは基本的にはすでに一読しているのだが、中にはまだ一度も全体を通して読んだことがないものもあるので、今回はゆっくりとそれらの書籍を読み進めていきたい。

日々、芸術への関心が高まる一方で、それに足並みを合わせるかのように、死への関心が高まっていく。当面は、ベッカーのように、死という現象を文化人類学的・社会的な観点と、芸術との関係性の観点から探究をしていく。今後はおそらく、現象学的、さらにはトランスパーソナル心理学との関係からそのテーマを探究していくことになるだろうと予感する。いずれにせよ、上記の五冊は死

に関する探究を深めてくれることは間違いないであろうから、これから春にかけて、何度も繰り返し読んでいく。

生命が誕生し、生命力を強く感じられる春に向けて死に関する書籍を読んでいくというのは不思議だが、死はいつでもどこでも、私たちの近くにいる。生命が存在するところには、絶えず、そして即、死が存在しているのだ。

ふと、意識の発達、ないし内的発達とは、死への感性を育んでいくことなのではないかと思った。死への感受性を育み、それを深めていくことが、人間発達における極めて重要なことであるように思えてくる。

私が死という現象に強く関心を持ったのは、本当にこの一、二年以内の話である。ひょっとすると、死への関心の芽生えのようなものは、すでにこれまでの人生のどこかであったのかもしれないが、その関心が芸術との関係性や、これまで探究していた人間発達と紐づく形で発露されることはこれまでなかったように思う。おそらくその背景には、やはり自分の内側の何かが変容したのだろう。それをきっかけにして、死の探究が始まったと言える。

アーネスト・ベッカーは非常に洞察溢れる思想家であり、彼の書籍の中で面白そうなものは、近い将来に全て読んでおこうと思う。備忘録としては、下記の書籍を今後購入しようと思う。

1. The Birth and Death of Meaning: A Perspective in Psychiatry and Anthropology (1962)
2. Revolution in Psychiatry: The New Understanding of Man (1964)
3. Beyond Alienation: A Philosophy of Education for the Crisis of Democracy (1967)
4. The Structure of Evil: An Essay on the Unification of the Science of Man (1968)
5. Angel in Armor: A Post-Freudian Perspective on the Nature of Man (1969)
6. The Lost Science of Man (1971)

フローニンゲン:2019/2/11(月)07:38

Some sounds go to the edge of dark nebula, and others come from there. Groningen, 08:43,
Tuesday, 2/12/2019

3811. 戦場で死に対する恍惚感を覚える夢

つい先ほど、今朝方の二つの夢について振り返っていた。実は今朝方の夢は、そこで終わりではなく、まだ別の夢を見ていた。

黒々とした蒸気機関車に乗り込んだ夢のすぐ後に、次の夢の場面が始まった。その夢の中でハッと
するかのように目を開けると、そこは廃墟で溢れる街の一角だった。

天気は晴れであり、目を開けた私は、まず太陽の光を感じた。次に気づいたのは、先ほどの列車の
中にいるのではなく、自分が戦車の中にいることに気づいたのである。戦車の中に座っている私の
横には、小中学時代の親友(HS)がいた。私は自分がなぜ戦車の中に乗り込んでいるのか理解が
できず、少し困惑をしていたのだが、その親友が「心配することはない」と述べた。

確かに周りには廃墟が見えるのだが、そこはそれほど不気味な場所ではなかった。私が乗っている
戦車には、その他にも何名かの外国人が乗っていた。私の位置からは、彼らの顔を確認することは
できなかったが、確かに数名の外国人が戦車に乗っていることはわかった。すると突然、近くでマシ
ンガンの銃声が聞こえた。

私は戦車から頭を出しており、廃墟の方を見ると、どこかの国の傭兵のゲリラ部隊がいて、銃撃戦を
行い始めた。彼らは全員白人であり、おそらくは東ヨーロッパ出身だろうと思われる。こちらの戦車
に乗っている一人の外国人が、廃墟の方に向かって、砲撃をした。すると、ゲリラ部隊は突然、標
的を私たちに変えて、戦車に向かってマシンガンを発砲し始めた。

私はすぐに頭を隠し、戦車の中に身を潜めることにした。戦車の構造上、戦車の中から上を見上げ
ると、広大に広がる青空と燦然と輝く太陽の姿が見えた。私はその光景に恍惚感を覚えながらも、
同時に、ゲリラ部隊から攻撃されているという恐怖感があった。戦車から砲撃を仕掛けている外国

人の一人に、相手の銃弾が当たってしまい、彼は大きな負傷をした。相手の数があまりにも多すぎであり、今彼らは私たちだけをターゲットにしている。

私はなぜだか諦めの気持ちに襲われた。おそらくこのまま戦っていても、私たちの命はないということを知ってしまったのである。そうした諦めの気持ちが生まれる直前は、死に対する強烈なまでの恐怖感があった。実際に、相手の銃弾を受け、流血している仲間の姿を見ると、より一層その恐怖感が強まった。

私は親友の方に目をやると、彼は最後まで諦めず、ゲリラ部隊に向かった砲撃を続けていた。だが私には、こちらの打つ手はもうほとんどなく、生存の可能性はほぼゼロに近いことがわかっていた。

相手のゲリア部隊には、どうやら東ヨーロッパの傭兵のみならず、イスラム圏出身の傭兵もいたようだ。死への恐怖感に私が苛まれている時、「これはジハード(聖戦)だ」という声が聞こえていたのである。「ジハード」という言葉を何度か頭の中で繰り返し唱えている自分がそこにいた。そして、戦車の上空に広がる青空と、燦然と輝く太陽の姿を眺めていると、それらの情景に対する恍惚感のみならず、死に対する恍惚感も生まれ始めたのである。

人は死を感じさせる極限状態において、死に対して恍惚感を抱くようだ。それに気づいた時、私の心は安らかになり、鳴り止まない銃声の音が自分の世界から消えていき、私は戦車の中からぼんやりと、青空と太陽だけをただ眺めていた。フローニンゲン:2019/2/11(月)07:59

No.1669: A Grain of Salt in Innocence

I can find a grain of salt in innocence. Groningen, 11:53, Tuesday, 2/12/2019

3812. 今朝方の夢の続き

時刻は午前八時を迎えた。日記の執筆と、過去に作った曲を聴き返していると、気がつかないうちに夜が明けていた。

今朝方の夢についての振り返りはまだ終わっておらず、残りの夢についても、取り急ぎ書き留めておきたい。夢の中で私は、ある大学のコンピュータールームの中にいた。そこには、ジョン・エフ・ケ

ネディ大学時代に、脳と意識に関するコースでお世話になった教授がいた。彼のファーストネームはデイビッドであったから、私は彼のことをデイブと呼んで親しくさせてもらっていた。

一台のコンピューターの前に腰掛けていた私に対して、デイブが微笑みながら声をかけてきた。どうやら私は、再びデイブのコースを履修しようとしていたのだが、まだ履修登録が済んでいないようだった。

ちょうどデイブが私に声をかけてきてくれたので、私はデイブにその旨を伝えた。するとデイブは、満面の笑みを浮かべながら、「それでは今からすぐに登録をしよう」と述べた。デイブが私を手招きするので、そちらの方に行ってみると、コンピュータールームのホワイトボードの前に置かれている教師用のパソコンを立ち上げて、その場で履修登録をしてくれるとのことであった。私はお礼を述べ、自分の学生番号を伝えた。

するとデイブは、学生番号の数字を間違えないように、ゆっくりと数字を打ち込み、教師用のコンピューターを通じて履修登録を済ませてくれた。その際に、なぜだかよくわからないのだが、デイブは私の学生番号と前後の学生番号を紙に書き出すことによって、数列を並べていた。

そして気がつけば、私の口には電動歯ブラシが挿入されており、歯を磨きながらデイブが履修登録をする様子を眺める格好になった。そろそろ口をゆすごうと思っていたタイミングで、デイブが履修登録を済ませてくれ、私は口に歯磨き粉が溜まっていたが、それがこぼれないようになんとかお礼を述べ、コンピュータールームを後にした。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面は、大学時代に過ごしたアパートが舞台となっていた。数日前の夢に、初めてこのアパートが登場したことを言及していたように思う。時間を空けず、再びそのアパートが夢の場面に現れたことにはどのような意味があるのだろうか。それについてはまた考えることにし、とりあえず、その夢の場面について書き留めておきたい。

夢の中で私は、ちょうど何かの合宿から自宅に帰ってきたようであった。自宅のドアを開けると、ベランダのドアが開いていたようであり、一気に強い風が玄関に吹き抜けてきた。その風を浴び、ドアを閉めたところで、私はすぐに、合宿で使った衣類を洗濯しようと思った。玄関から部屋に入っただけのところに洗濯機が置かれているのだが、見ると、洗剤がないことに気づいた。いや、部屋全体を

してみると、ことごとく物が置かれておらず、どうやら私は、この場所で新生活を始めたばかりなのだと気づいた。洗剤がないことに気づいた私は、洗濯をするのかどうか悩んだが、合宿中に汗をかいていたこともあり、すぐに洗濯をしたいと思った。

そこで洗剤なしで洗濯をしようと思い、衣類を洗濯機に入れ、洗濯機のボタンを押してみると、なぜだか洗濯機の背後にある壁にシャワーがあり、そこから水が溢れ出してきた。私は顔にその水を浴びてしまい、すぐさまシャワーの水を止め、顔を手で拭った。

その後しばらく、私は洗濯機の前に佇みながら、再度、洗濯をするのか否かを考え直していた。その間に、私の気持ちは、これからの新生活に対する期待と、どこか寂しげな気持ちの双方で揺らいでいるようだった。とりあえずベランダのドアを閉めようと、部屋の中に一歩足を踏み入れたところで夢から覚めた。フローニンゲン:2019/2/11(月)08:33

No.1670: Winter Twilight

Today has been fine weather all day long. Twilight is talking to me. Groningen, 17:09, Tuesday, 2/12/2019

3813. スケープゴートの論理

時刻は午後の三時半を迎えた。今日は久しぶりに天気恵まれ、つい先ほどランニングとウォーキングを兼ねて、近所の河川敷のサイクリングロードに外出した。先日の日記で述べたように、天気の良い日は、30分でもいいので、外の空気を吸いに外に出かけるようにしている。

少し走ったり、ゆっくり歩いたりしながら気分転換を図り、それによって心身の状態が整っていく。そのようなことを先ほども実感した。

今日はこれから、バッハのコラールに範を求めて作曲実践を行い、その後に、アーネスト・ベッカーの書籍の続きを読んでいきたい。ベッカーの書籍の中で最も有名なのは、間違いなく“The Denial of Death (1973)”だろう。昨日から読み始めたのは本書ではないのだが、本書には特別な思い出がある。今から五年前に私がアーバインで生活していた時、街の中心部から外れた場所にあるワイン専門店には、シュタイナーのバイオダイナミクス農法で作られたワインが売られていた。当時の私

は、週末だけワインを飲む習慣があり、その頃はよくこのワインを購入していた。そのワイン専門店には、ワインバーも設置されており、ある日、ワインバーのカウンターでワインを試飲していたことがある。

その日はちょうど、ノートを持参しておらず、その代わりに、発達心理学のテキストを持ってきており、飲んだワインに関する情報と感想をテキストの余白に書き込んでいたところ、一人の中年男性に声をかけられた。そこから私たちは、ワインを飲みながら、いろいろと雑談をしており、その方から、ベッカーの“The Denial of Death (1973)”を勧めてもらったという思い出がある。その後私はアーバインを離れ、東京に一年ほど住むことになり、その時に本書を購入した。

ある人との出会いの背後には必ず縁があり、ある一冊の書籍との出会いの背後にも縁があるのだろう。そのようなことを実感させる思い出を、先ほどふと思い出していた。

今日読み進めていたのは、ベッカーの“Escape from Evil (1975)”という書籍である。本書の中に、オットー・ランクの思想が随所に引用されており、その中でも特に、スケープゴートに関する引用が印象に残っている。

スケープゴートを活用する一つの論理として、スケープゴートを生贄にすることによって(殺すことによって)、自我が不可避に抱える死の恐怖を弱める働きがある、あるいは死の恐怖から私たちの意識を逸らす働きがある、という説明に目が止まった。スケープゴートを立てて物事を進めていくというのは、経済・政治の領域のみならず、日常の至る所で見られる現象であり、その背後には一つとして、自らの死から目を逸らせようとする見えないメカニズムがあるというのは重要なポイントだろう。

私たちの自我は極めてしたたかであり、狡猾である。生贄となった他者が死を経験し、それを眺めるとき、死という罰から解放されたと自我は思い込む傾向がある。それは、自分はまだ死んでいないという安心感、いや、誰かが生贄にされたことによって、自らの命が伸びたいという錯覚を引き起こすのだろう。スケープゴートを立てることの背後には、こうした自我の狡猾さが窺える。そしてそれは、私たちの自我が死の恐怖から目を背けようとする特性と密接に関わっている。自我の狡猾さ、および死の恐怖というのは、おそらくまだまだその他の現象の背後に潜んでいるものだろう。フローニンゲン:2019/2/11(月)16:04

3814. 甘美な死と新生活を示唆する今朝方の夢の再想起

時刻は午後の八時を迎えた。今日もまた、人生のある一日が終わりに向かっている。日々、絶えず新たな一日が始まり、その日が終わっていくことに対して、純粹に驚きの念を持つ。また、それに対して畏怖の念も抱く。

新たな一日がやってきて、それが終わる。そしてそれは、今後も永遠に続くように見えながらも、いつか突然新たな一日がやってこない日に遭遇することになる。

本当に、人間の人生とは何なのであろうか。生きるということは何なのであろうか。そうした根本的な問いが脳裏をよぎる。一日がこのようにゆっくりと終わりに近づいている様子を眺めていると、それは私という一人の人間の人生がどこかへ向かっていることを示していることに気づく。

就寝まであと一時間半ほどとなったところで、今朝方の夢について思い返していた。今朝は、死に関する夢を見ていた。

東欧諸国の廃墟にいて、戦場と化した戦車の中にいた自分の気持ちについて改めて振り返っている。戦車の中で感じた死への恐怖、そして死への恍惚感。特に後者の感情は一体何だったのだろうか。誰かが、「死は甘美なものである」と述べていたのを思い出す。死は、私たちの人生の最後に待っている褒美のようなものなのだろうか。

虚飾され、歪曲化され、そして忌避される対象に貶められた死ではなく、真の死を体験するためには、真の生を生きて行く必要があるだろう。自らの生を真に生きた者にだけ、真の死が甘美なものとしてやってくるのかもしれない。

死に関する探究を深めていくに際して、私はまた近々、これまで蓄積してきた自分の諸々の事柄を手放し、出直す必要があるようだ。その予感はずでにしている。

今朝はその他にも、新生活を暗示する夢を見ていた。具体的には、大学時代に住んでいたアパートが夢の中に現れ、あれは大学時代の記憶と、これから始まるであろう新生活に対する自分の気持ちが相まって生み出されたものだったのかもしれない。

今、私は再び人生の分岐点に差し掛かっており、この夏からは新しい国で生活を始めることになるだろう。それを目前に控え、東京で一人暮らしを始めた大学時代の感覚が蘇ってきているのかもしれない。不思議なことに、アメリカで初めて生活を始めた時にも、オランダで生活を始めた時にも、今朝のような夢を見たことはなかった。アメリカで生活することや、オランダで生活することは、自分の人生における極めて重要な分岐点であったことは間違いないと思うのだが、今回のそれは、アメリカやオランダで生活をするようになったこと以上に大きな意味を持っているのかもしれない。自分の深層意識はそのようなことを伝えようとしているように思える。

数日前に私は、日本が外国のように感じられるようになったと書き留めていた。その背景には、この三年間において、感覚の根本的な変容があったと言えるだろう。この三年間において何が変わったのかを自分で判断することは難しいが、内側の諸々の感覚が変わったことだけは確かだ。感覚を受け取る自己も、感覚を意味付ける自己も変わった。

そして何より、生み出される感覚自体も変わったのだ。今年の夏から、私は本当にどこで生活を始めるのだろうか。あと数ヶ月でその日がやってくると思うのだが、この瞬間の自分にはそれがどこかのかはまだわからない。厳密には、それは確定していないと言った方が正しい。ただし、いずれの国に住むことになったとしても、一、二ヶ月ほど、札幌で生活をしようと思う。

札幌は、心理的にフローニンゲンに一番近く、東京はあまりにも心理的に遠い。東京に漂う死へ誘う香りと手招きに飲み込まれないほどに、今の私は内面的な成熟を遂げていない。フローニンゲン：
2019/2/11(月)20:31

3815. 身体的・精神的な癒合症の治癒に関する夢

今朝は六時に起床し、六時半過ぎから一日の活動を始めた。天気予報を確認すると、今週一週間は雨が降る日がなく、天気に恵まれるようで何よりである。

今日は午後から、半年に一度通っている歯医者に行く。この夏から生活地を変えることを考えると、今回の歯科検診が最後になるかもしれない。太陽の姿を拝みながら、歯医者に向かうまでの道を味わいたいと思う。

今朝方もいくつか夢を見ていたので、それらについて書き留めておきたい。夢の中で私は、おそらく日本であろう場所の、あるビルの中にいた。ビルの中にはいくつもの部屋があり、それぞれがセミナールームのような内装をしていた。セミナールームの一室で、私は一人の男性と話をしていた。その男性は、中学校か高校時代の先生、あるいはそれ以降にお世話になった先生と呼べるような人であったが、顔があまり思い出せない。どのような経緯であったかは忘れてしまったが、その人が突然、私の行っていることや発言に対して言いがかりをつけてきた。

最初私は、その人の言い分を冷静に聞いていたのだが、途中で埒があかないと思うようになった。そして私は、諦めの気持ちと、少しばかり憤りのようなものを感じていたため、その人がホワイトボードを用いて何かを説明しようとする仕草を見せて後ろを向いた時、手に持っていたシャーペンをその人の首に突き刺した。

その時の私は冷静さを少し失っていたのだが、一つだけ冷静であったのは、首の骨の中でも第三頸椎(けいつい)のあたりにシャーペンを突き刺そうと考えていたことだ。私がなぜこの骨をめがけてシャーペンを突き刺したのは定かではないが、ヨガのインストラクターの資格取得に向けて人体について学習している時に、第三頸椎(通称「C3」)の名前を聞くことが多かったため、その骨の名前が印象に残っており、無意識的にその骨を狙ったのかもしれない。

シャーペンを突き刺されたその人は、痛みと驚きで慌てふためいていた。それでもなお、まだ私に言いがかりをつけようとしてきたので、私はそこからさらに、攻撃を加えることにした。

私は、その時にはすでに冷静さを取り戻しており、仕方ないと思いながら、頭のとっぺんの百会穴(百会のツボ)をめがけて、左ひじを思いっきり突き落とした。するとその人は完全に地面にうずくまり、もはや起き上がることができなかった。その光景を見ながら部屋を後にしたところで夢の場面が変わった。厳密には、そこで一度目覚め、その時の時刻は午前三時過ぎであった。

上記の夢について改めて振り返ってみると、私が男性の第三頸椎を狙って攻撃を仕掛けたという点は興味深い。ヨガのインストラクターの資格を取得したのはもう七年前の話であり、その後、インストラクターとして活動することもほとんどなかったため、第三頸椎の性質についてほとんど忘れていた。再度調べてみると、第三頸椎の中心には、大きい穴が開いており、それは椎孔(ついこう)と呼

ばれる。そして、椎孔の中は脊髄が通っている。第三頸椎は脊髄と密接に関係した場所であるから、首の骨の中でも重要な部位だと言えるかもしれない。

夢の中の私は、確かに攻撃的な意識があったが、かといって、この骨を攻撃することによって、脊髄を損傷させ、崩壊させようとするような意図はなかった。

もう少し第三頸椎について調べてみると、生まれ持って頸椎の内のいくつかの骨が癒合している人がいるらしい。これは「頸椎癒合症」と呼ばれ、それが見られることが多い部位がまさに第三頸椎と第二頸椎の間だということを知った。

もしかしたら夢の中の私は、その人が頸椎癒合症を患っていることに気づき、その症状を解消させるために、第三頸椎あたりをめがけてシャーペンを突き刺したのかもしれない。身体的な頸椎癒合症の解消だけを意図してそれを行ったのではなく、その人が精神的な次元で患っている何かしらの癒合症を解消させようとしたと見ることもできる。

発達とは分離と統合のプロセスを経て進んで行くことを考えると、確かに外見上は荒々しいが、シャーペンを思いっきり第三頸椎の椎孔を目指して突き刺したのは、その人の身体的・精神的な癒合症の治癒を意図したものだのかもしれないと思う。いやそれは意図したというよりも、私の無意識がそのような行動を取らせ、結果的にそうした治癒を実現する行為であった可能性があると解釈したほうが良いかもしれない。フローニンゲン:2019/2/12(火)07:10

No.1671: A Soft Feeling

It is close to the time when I go to bed. Now, I'm being embraced by a peaceful and soft feeling.
Groningen, 21:17, Tuesday, 2/12/2019

3816. 近づく春:今朝方の夢の続き

時刻は午前七時を迎えた。今、小鳥の爽やかな鳴き声が聞こえて来る。

鳥たちも感じ始めているようだ。春がもう目の前に迫っているということ。

昨年と比べて、二月のこの時期が本当に暖かく感じられる。実際に、今週は最高気温が軒並み10度近くまで上がるらしい。繰り返しになるが、昨年この時期に春が来たと思っていたところ、三月初旬には最高気温が再びマイナスになる日が何日かあったので、今週の暖かさを持って春の訪れだと解釈するのは時期尚早だろう。ただし、こうした暖かさを生み出す時期になったことは確かであり、ここから気温が上下に変動し、その後、確実に春が訪れるだろう。まさに、天気も一つのリビングシステムであり、非線形的な発達プロセスを持っているのだ。

小鳥たちが再び合唱を奏でるかのようには鳴き声を上げている。その声を聞きながら、もう少し今朝方の夢について振り返っておきたい。

夢の中で私は、実際に通っていた中学校の校舎の中にいた。より正確には、ある一つの教室の中にいた。その時はまだ授業が行われておらず、休憩時間のようにであった。教室の後ろで、私は社会人になってから知り合った一人の知人の方と話をしていた。

その方が彼のツイッターの投稿を見せてくれた。そこには二、三行ほどのつぶやきが投稿されていた。そのつぶやきを読みながら、私は不思議な感覚に陥った。つぶやきの言葉そのものは外面現象のはずなのだが、私はつぶやきの言葉の中にいたのである。

これは幾分分かり難い体験かもしれないが、つぶやきの言葉を単に文字として外界から認識していたのではなく、その文字が作り出す意味世界の内側に入り込んでいた感覚があったのだ。

しばらくして私は我に返ると、その方に挨拶をしてから教室を離れた。教室のあった二階から一階に降りてみると、どうやらもう直ぐ授業が始まるようだった。しかし私は、授業に参加したいと思わなかったので、ヘッドホンを取り付け、音楽を聴きながら校舎の中をウロウロしていた。

靴箱の方に向かい、向こう側に見えた体育館の中で運動でもしようかと思っていたところ、先客がいるようであり、中には、当時お世話になっていた先生方がなぜだか皆高齢者になっており、体育館の奥側の扉を開け、陽だまりの中で談笑をしていた。それを見たとき、私は彼らの邪魔をしないようにしようと思い、また彼らと話をするのが面倒でもあると思ったので、靴箱の途中から引き返して、再び校舎の中に入った。

その後私は、先ほどとは違う教室に行き、そこで一人の少女と遭遇した。そして傍らには、中学校時代にお世話になっていた先生のうち、一人の先生がそこにいた。その少女は、日本とどこかの国のハーフのように思えた。確かに日本語は流暢なのだが、時折英語が自然と口から発せられていた。

先生と少女を含め、私たちは雑談をしており、私がある英単語を述べたとき、先生がそのスペリングについて私に尋ねてきた。私は、その単語の中に含まれる「q」を間違えて、「エス」と発音してしまい、隣にいた少女がその誤りを指摘した。私は思わず笑みを浮かべ、自分の間違いを修正した。その後、もう一つ別の単語が話題に上がり、私はそこでも、「q」を間違えて、別の音として発音してしまい、また少女から指摘を受けた。今朝方はそのような夢を見ていた。フローニンゲン:2019/2/12(火)
07:30

No.1672: From the Ancient Times

Several feelings about death may not change at all since the ancient times. Groningen, 08:57,
Wednesday, 2/13/2019

3817. 知性の無数の重心点を作る網の目としての人間

時刻は午前九時に近づきつつある。辺りはすっかり明るくなり、今日は風もほとんどなく、とても穏やかな一日になりそうだ。

先ほど、早朝の作曲実践を終えた。これから、少しばかり過去の日記の編集をし、その後、アーネスト・ベッカーの書籍の続きを読み、それと合わせて、音楽理論に関する書籍を読み進めたいと思う。

音楽に関する探究と、霊性さらには死に関する探究が並行して進んでいく。二つのベクトルの力はいつか必ず合成されるだろう。

昨夜、音楽理論の解説書を読んでいたところ、セカンダリードミナントの活用に関して、自分が幾つかの点において誤解をしていたことに気づいた。どうりで時にその活用に迷いが生じていたわけである。セカンダリードミナントの活用を少し難しく考えすぎていたようだ。それを活用する際には、移動先のコードに対して、完全四度下のドミナントセブンスコードを作ればいだけだったのだ。これでもう、どのような調においてもセカンダリードミナントを柔軟に活用していけるだろう。

早速、昼食前の作曲実践の際にこの技法を活用してみようと思う。和音というのは非常に奥が深い
が、ここまで少しずつ和音について学びを深めていったこともあり、徐々に作曲の中で活用できる
和音の幅が拡張されているように感じる。ここからもまた学習と実践を続け、和音に習熟していき
たいと思う。

今朝方、どういうわけか、知性と意識の重心について考えを巡らせていた。ケン・ウィルバーやロバ
ート・キーガン、さらにはスザンヌ・クック=グロイターなどの発達論者は、発達に重心構造を見出そうと
する。それに対し、カート・フィッシャー、ポール・ヴァン・ギアート、エステル・セレンなどの発達論者
は、発達に重心構造を見出そうとはしていない。

早朝にふと、私たちには多様な知性領域があり、その数だけ重心なる点が存在するのだが、その
位置は文脈によって変化するだけではなく、その知性が活用される文脈が生起されていない状況
においては、重心点は一時的に消失した状態を保つのではないかと思った。つまり、知性の重心、
ないし意識の重心というのは、あるとも言えるしないとも言える明滅する点のような存在なのではな
いかという考えが浮かんだのである。私たちがある物体を認識するまでは、まるでそれはこの世界
に存在しなかったかのように見なされているのだが、ひとたび認識の光が当てられるとそこにぼっか
りと浮かぶ点のようなものとして知性の重心を捉えることができるかもしれない。

私たちは無数の知性領域を持っており、それらの一つ一つの知性領域に対して、文脈に応じて変
動する重心点を見出すと、人間という存在は、多様な知性の無数の重心点を作る網の目だとみな
すことができるかもしれない。どこかそれはニューロンの構造及び特質とも似ており、特定の文脈に
おいて、特定の活動に従事する際に、ニューロンの一部が発火するように、知性の無数の網の目も、
その文脈と活動に応じて、ふさわしい重心点を活性化させる—動的に発露させる—と言えるかも
しれない。ある特定の文脈と活動に応じて発火されるニューロンと知性の重心点に関するそのよう
なイメージが早朝に現れていた。フローニンゲン:2019/2/12(火)09:07

No.1673: Beautiful Moths around the Smell of a Corpse

What is a difference between humans and moths attracted by the smell of a corpse? Whereas
humans have a fear of death, moths may not. On the other hand, both of them can be a captive of
the beauty of death. Groningen, 12:20, Wednesday, 2/13/2019

時刻は午後七時半を迎えた。今日は一日を通して良い天気であった。

夕方、黄昏が何かを私に語りかけているように思えた。

冬が静かに進行し、もう直ぐ春がやってくる。その時には、先ほど眺めていた黄昏も表情を変えるだろう。

先ほど黄昏が語りかけてきていたのは、別れだったのかもしれない。そして、新たな季節でまた会う約束について語りかけていたのかもしれないと思う。

先ほど夕食を摂りながら、改めて、現在の学校教育におけるテスト、さらには偏差値というものについて考えていた。端的には、学校のテストも偏差値も、根本的には何も語ってくれない単なる数字なのだ。確かに、例えば偏差値は、分散から算出されるものであるため、母集団のどこに自分がいるのか、上位からどれくらいの位置に自分がいるのかなどはわかる。だが、それがわかったところで一体なんだというのだろうか。

偏差値は、その人の学力の質的な特性については何一つ教えてくれないのだ。そうした偏差値と密接に結びついた学校におけるテストの類は、全くもって民主主義的ではない。そこでは、テスト結果との対話がなく、テストを実施した教師との対話も基本的にはない。対話のない民主主義は成り立つのだろうか？ そのように考えてみると、テスト結果に関して一切の対話が生まれない現行の教育は、多分に非民主主義的なものだと言えないだろうか。また、偏差値なるものを上げるためには、基本的には他人を蹴落とさなければならない。偏差値を取り巻く戦争のようなものが、現代の教育には依然として存在している。

そうした本質的には何も語ってくれない偏差値を崇め、それを高めることに躍起になることが馬鹿げた試みであるということに対する覚めた目が無いというのは大きな問題だろう。偏差値というシンボルを神聖化し、それを高めようと躍起になることは、カネを神聖化し、それをより多く獲得しようと躍起になることと同じ構造を持っており、同時に、同じぐらいに馬鹿げたことだと思える。

今日は、アーネスト・ベッカーの書籍とオットー・ランクの書籍を読み進めていた。ベッカーの書籍の中で、ニューヨークの精神科医の興味深い観察結果が示されていた。端的に述べると、マーケットが上昇期にある時は、全能感のようなものがウォールストリートの人々の間に漂うが、マーケットが下降期にある時は、人々は無能感 (impotency) を感じるというものである。

この観察結果から、カネというシンボルに自己を投影し、そのシンボルの多寡によって、自らの精神状態が変動してしまう哀れな人間の姿が見える。ここでは、人間存在がシンボルと同一化しており、自らをカネと同一視してしまう問題が窺える。ひとたびカネを絶対的なものとみなし、全能な存在だとみなしてしまったら、マーケットというカネの集合としてのシンボルが力を失った時に、それに対して不要なまでに不安を感じ、あたかも自分の力まで減退してしまったと錯覚してしまう。

もしかすると、人間発達において抽象的な事柄を扱える能力を獲得することは、技術の進歩と同様に、一概にも良いことだとは言えないのかもしれない。カネという幻想的な概念は得体が知れず、極めて抽象化された存在であり、カネを取り巻く政治・経済的な事柄は極めて複雑であるがゆえに、下手に脆弱な抽象思考能力を人間が獲得してしまったばかりに、カネに踊らされるという現象が生じてしまっているのかもしれない。フローニンゲン:2019/2/12(火)20:01

No.1674: A Frozen Wave Motion

There is a source of dynamics in the innermost place of a frozen wave motion. Groningen, 17:45, Wednesday, 2/13/2019

3819. 真の自己理解の難しさ

今日は午後に、歯医者で定期健診を受けに行ってきた。幸いにも、虫歯はなく、いつものように、また来週に歯のクリーニングを行ってもらうことになった。この歯医者で最初に訪れたのは、今からもう二年前のことであり、その時の私は、定期的に歯医者に行く習慣がなく、親知らずの痛みのためにこの歯医者で訪れた。今日は、二年前に撮影したレントゲンが古くなっているそうだったので、再度それを撮り直した。しかしよくよく考えてみると、今年の夏からは生活地を変え、今回の歯科検診が最後であるから、レントゲンを撮る必要はなかったのではないかと後から思った。当然、歯科医は私がこの夏にフローニンゲンを離れることを知っていないのだから仕方ないのだが、もう少し自分の機

転を利かせることができれば、レントゲン撮影をしなくて済んだのかもしれない。日常、もう少し頭を使う必要があることを実感する。

今日は午前中に、エーリヒ・フロムの“The Anatomy of Human Destructiveness (1973)”を本棚から取り出した。アーネスト・ベッカーやオットー・ランクの書籍を最近読み返しているが、初読のときの日付を確認すると、それらは往々にして今からちょうど一年前に読まれていたことがわかる。彼らの書籍に対して関心を示すことの背後には、何かしらのサイクルがあるようだ。彼らの書籍に加えて、午前中、ハーバート・マルクーゼの“Art and Liberation: Collected Papers of Herbert Marcuse, Volume 4 (2017)”を購入した。

目次を見た瞬間に、芸術を取り巻く社会学的な考察に響くものがあり、本書を迷わず購入することになった。先日は、イギリスの書店に、芸術と狂気に関する書籍を注文しており、近々それが届く。上述の著者の書籍と合わせて、ここからまた少しずつ自らの関心に沿って探究を進めていこうと思う。

本日、ベッカーの書籍を読んでいた時に、真の自己理解を得ることの過酷さに改めて気づいた。ベッカーが指摘するように、真に自己を理解するというのは、己の自我の虚構性や狡猾さについて自覚的にならねばならず、そうした虚構性や狡猾さは、絶えず己の動物性や死を拒絶しようとする衝動に基づいて構築されている。ここにもまた、自我の狡猾さと死の拒絶に関する問題が密接に関連していることが見て取れる。真に自己を理解していくというのは、自我の狡猾さに自覚的になることであり、死の恐怖を乗り越えていくプロセスだと言えるだろう。

巷では、自己理解のためのリフレクションの実施が叫ばれているが、それは決して本質的な自己理解を得るためのものではなく、せいぜい、狡猾な自我に踊らされる形でなされるお遊戯程度のものに過ぎないのではないかと思う。

自我の狡猾さに自覚的になるというのは本当に労力のいることであり、そう簡単に実現できるものではない。また、自我の虚構性に気づくというのも至難の技であり、その背景には、私たちの自我は、絶えず虚構に虚構を上塗りする形で自己保存をすることを得意としているからである。結局のところ、本当に死を恐れているのは私たちというよりも、私たちの自我なのだろう。自我は、自己保存と永続

性に関する極めて強い欲求を持っており、その欲求に基づいて狡猾にも様々な虚構を作り上げていくのである。

自我の狡猾さと虚構性を暴いた先には、また新たな実存的課題が立ちはだかつており、そう考えてみると、自我の狡猾さと虚構性に自覚的になることを強く勧めることはできそうにない。だが現代人の多くは、狡猾な自我に踊らされることによって、もはや耐えられない苦痛を感じ始めているのも確かだろう。そうなってくると、やはり私たちは発達の手を進めなければならないのだろうか。フローニンゲン:2019/2/12(火)20:22

3820. 今朝方の夢

時刻は午前六時半を迎えた。今朝は五時前に一度目が覚めたが、起床したのは六時であった。

今日もゆっくりと活動を始め、自分のなすことを本日もいつもと変わらず行っていこうと思う。とにかくゆっくりと着実に歩き続けていくこと。それを忘れないようにする。

いつものように、まずは今朝方の夢について振り返っておきたい。夢の中で私は、おそらくアメリカ西海岸のどこかの都市の一軒の家の中にいた。その家の中は閑散としていて、あまり物が多くない。

家の中に入ると、そこには何人かの人があった。よくよく見ると、私が以前塾で働いていた時の同僚の女性が一人いた。どうやら、その他の人たちも同じ塾で働いているらしい。その場には、合計で四名の人がいて、四人はテーブルに腰掛けて飲み食いをしながら談笑していた。私もその輪に加えてもらうことにし、テーブルに腰掛けた。

どのような文脈でそのような話になったのか不明だが、そこでは「人間は騙す生き物である」という主題について話がされていた。「人間は騙す生き物である」というのは、他者を騙すのみならず、人間は自分自身を身体的にも精神的にも騙す生き物でもあるという意味である。しばらくテーブルで話をしていると、私はその場を離れ、その家の別の部屋に向かった。部屋の扉を開けると、そこには畳の座敷部屋が広がっており、奥には中学時代の部活のキャプテンであった先輩と、先ほどまでテーブルで話をしていた男性が二人いた。

どうやら私たちは、この家で共同生活をしているようであり、ここでルームシェアをしながら塾に勤務しているようだった。私は衣服をあまり持ってきておらず、その部屋の押し入れを覗いていると、そこにはその他の人たちの衣服が並べられていた。押し入れの中に自分の衣服はないかを探していたところ、後ろから一人の男性に声を掛けられた。

男性:「私の衣服を差し上げましょうか？」

そのように男性は述べ、私は有り難く思った。ただし、その方の体の大きさを考えると、サイズが合わないように思えた。そこで今度は、中学時代の部活のキャプテンも、私に衣服を提供してくれると言う。だが、キャプテンはひととき大きな人であったから、サイズが合うことを期待することはできなかったのだが、ジャージの下に関しては、昔キャプテンが着ていたものだということもあってか、サイズが合いそうな気がした。しかし、それは思い出の品だということをキャプテンは思い出したようであり、結局私は誰からも衣服をもらうことがなかった。

そこで突然、後ろから高校時代の友人が部屋に入ってきて、「近くの名山に観光に行く時間が迫ってきたよ」と述べた。私はそのようなことを計画していたわけではないのだが、友人曰く、それは塾が開催してくれる観光ツアーのようであり、名山を拝むとても良い機会のようにであった。なぜだか私はあまり乗り気ではなく、友人は私がそのような態度であることを珍しがっていた。普段であれば、好奇心に従って、そうした観光に出かけて行くところだが、その日は幾分違った。私はもう少し待ってもらうことにし、もう一度一階に降りて行った。

すると、そこではまだ何人かの人たちがテーブルで話をしていた。彼らと少し話をしたところで、私は観光ツアーに行く決心をし、目的地まではバスにしばらく乗る必要があったので、テーブルにある食糧を分けてもらうことにした。一枚のペーパータオルに、クッキーと果物を包もうとしたところ、少々欲張ってしまったためか、ペーパータオルで包むことができず、食べ物が落ちてしまいそうになった。その様子を、同じ塾で働いていた同僚の女性は笑顔で見ている。

食糧だけではなく、お茶も持っていこうと冷蔵庫を開けたところ、飲み物が全く入っておらず、「お茶はどこにありますか？」とテーブルにいる人たちに尋ねると、全員は爆笑して、「ここにあるじゃない！」と述べながらテーブルの上を指差していた。テーブルの上には、私が先ほどまで飲んでいた

お茶が入ったコップがあった。コップのままお茶を持っていくことはできなかったので、飲み物はとりあえず道中で購入することにし、食糧を持って家の前で待っているバスに向かうことにした。フローニンゲン:2019/2/13(水)07:05

No.1675: The Peaceful Ego

The ego is relaxing very much, being dissolved in peacefulness. Groningen, 21:04, Wednesday, 2/13/2019